

フィリピンの思い出

第5期生 田中照太

小野ゼミという最高の学習環境に身を寄せた私。しかし、ここでも学ぶことのできないこと——しかもそれは社会へと羽ばたく前にきつと学んでおくべきこと——があるな、という思いが常に頭の片隅にありました。それは、海外から日本を冷静に、客観的に俯瞰することで得られる発見、気付きみたいなものです。就活も終わり、本格的に卒論を執筆する段階になったときに、先生から思いがけない発表がありました。それは、夏の終わりに締め切られる懸賞論文に挑戦し、かつ出来が良ければ、それを卒論と見なすことも可能で、秋以降は留学に行っても良いというものでした。反射的に「その方向で！」と先生に伝えた私がいきました。

晴れて手にしたフィリピン行きの切符。もちろん、同期が最後の夏休みを謳歌するのを尻目に黙々と卒論を執筆するのは容易いことではありませんでした。前歯の裏や灰はきつと黒ずんだし、白髪も生えだし、体脂肪率は史上最低記録を観測しました。しかし、日本から離れた南の島に降りたつと、不思議と体が浄化されていくことに気付き、驚きました。そこにあったのは、人々の無垢で純粋な溢れるほどの笑顔であり、恐ろしささえ感じさせるような壮大で神秘的な森であり、「白い砂、青い海」というのはまさにこのことを指すためにあるフレーズなんだと思わせるようなビーチでありました。1週間も過ごすうちに白髪もなくなりました。代わりに、なぜか生まれて初めてヒゲが生え始めました。

ここで、フィリピンで学んだことについて、留学の醍醐味のひとつである英語という観点から綴ろうと思います。とりあえず身を運べば英語なんてできるようになる、なんて発想は安易で、自ら積極的に人に話しかけ、自分の英語力の欠如を認識し、自主学習し、また人に話しかけ、というサイクルを継続する自主性・社会性が極めて重要と感じました。そこはさすが自主性・社会性を尊重する小野ゼミで学んだ私です。この期間、色んな場所に行き、色んな人と会話をすることを通じて、英語力を向上させるだけに止まらず、今まで知らなかった新たな価値観や哲学といったものまでも彼／彼女らから吸収することができ、タナカショウ太を色んな意味で太い人間に成長させることができたと自負しております。もちろん、上述



現地で知り合った友達と著者

した「社会へと羽ばたく前にきつと学んでおくべきこと」も私なりに学んできたつもりです。

こんな抽象的な言い回しは止めて何を学んだのかを具体的に書け、という批判を受けるかもしれませんが、それは教えてあげません（紙面の関係も大いにあります）。6期の皆さん、その何かを学びたかったら卒論を早く終わらせて留学に行ってくださいね。最後に、ゼミ期間中のフィリピン行きを許可してくださった小野晃典先生へ。本当に貴重な経験ができました。ありがとうございました。